

昭和16年2月1日 第三種郵便物認可
平成18年10月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第37巻第10号



俳句雑誌[おき]

10月号

沖 発行所

錨

綱

能村 研三

秋櫻子・風生と市川

昭和四十五年十月の沖創刊号巻頭に水原秋櫻子は次のような祝句と小文を贈っている。

真間川をおほふ無花果熟れにけり
秋櫻子

「これは空想の句だが、むかし真間山下にはたしかにこういう景があった。今でもおそらくあることだろう。一日がかりで歩いてみたら何か得るところがあるかも知れない。時季は秋がよい。」

短い文章だが、なかなか含蓄に富んでいる。「沖」の門出に相応しいあたたかい文章で、これから新しい結社に集う人たちが、具体的にどのような俳句を作っていくかを、この一文で暗示している。冒頭で「空想の句」とわざわざ断わっているが、水原秋櫻子は、高浜虚子の客観写生に異論を唱え、「文芸上の真実」を求めて「ホトトギス」を離脱した人である。当然この句は「空想の句」であっても構わなく、それより一日かがりで歩いてみて、心に残る心象として俳句を作れば良いことを教えているようにも思う一文である。

水原秋櫻子は数多くの句集を作っているが、その第一句集『葛飾』は、代表的な句集であると共に、文学史

蟻の列見つむ項に憂さありて

水底の砂の流れを見て晩夏

野分くる船尾をはしる錨綱

椰の樹に靈気のひそみ夏果つる

関 址 は み ち の く は じ め 秋 の 声

芭 蕉 碑 は 楸 邨 筆 な り 露 葎

雨 後 新 涼 樹 下 に 奉 納 土 俵 あ り

藤 杉 の 絡 み 修 羅 な し 秋 澄 め り

爽 籟 に 藻 び か り 著 き 南 湖 か な

さ や け く て 城 の 梁 う ろ こ 彫

的にも、重要で、その題名にも「葛飾」の名があることから、市川とは縁が深い俳人である。そして全国に百基を越える句碑が建立されているが、その一番目の句碑は真間山弘法寺に建立されている。

梨咲くと葛飾の野はとのぐもり
また、富安風生は昭和十二年虚子を中心に行われた「武蔵野探勝会」で真間を訪れ、境内の「伏姫桜」で知られるしだれ桜を詠んだ。

まさをなる空下りしだれざくらかな
この句も真間山の境内に句碑として刻まれている。

秋櫻子、風生と昭和を代表する俳人が共に葛飾（今の市川）の地を詠んだことで、今の「沖」を含めた俳人たちが市川を舞台に活躍を始めたことに繋がったようにも思う。

なお、九月十六日から「市川市文学プラザ」で「秋櫻子と風生が詠んだ葛飾」展が開かれる。

能村 研三



落つる水

林 翔

糸瓜忌

九月十九日は子規忌である。生まれたのが慶応三年九月十七日だから数えどし三十六歳といつても、満では三十五歳と二日にしかならない。その短かい生涯で俳句の革新と短歌の革新をやつてのけたのであった。

「俳句」という言葉を創つたのも子規である。それ以前は発句はつぐと言っていた。連句の最初の句という意味だが、とかく遊びに陥り易い連句から切り離すために敢て「俳句」と名付けたのであった。

子規庵の庭には糸瓜棚があった。病臥しつつ子規は糸瓜の花が咲き、長細い実が成長してゆくのを楽しみに行っていたのであろう。糸瓜の水は化粧水にもなるというが、子規にとつては咳の薬なのであった。

余りにも有名な子規の絶吟三句。

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな
痰一斗糸瓜の水も間に合はず

吹割の滝 三句

涼しさや千筋の糸は落つる水

滝になる水赤岩を青岩を

立つ巖は神の膚か陽も涼し

大清水 一句

笹の葉に掬ふ清水のおいしさよ

夏木立光の縞を道に着せ

万緑裡心もみどり濃く淡く

身を包む百合の風かなリフト行

青葉縞青葉緋やドライブウエー

もの言はぬ膚に代りて「涼し」と言ふ

身を揺らす気を初風と思ひけり

をとゝひのへちまの水も取らざりき

死を覚悟した子規は自分を指して佛と言ひ、糸瓜の水も役に立たぬ程の重病を「痰一斗」と誇張表現し、第三句では諦めの境地を表現している。

子規最晩年（明治35年）の句を若干挙げよう。

暖爐たく部屋暖に福寿草

葉のむあとの蜜柑や寒の内

朝霜に青き物なき小庭かな

薔薇を剪る鉄の音や五月晴

翡翠や池をめぐりて皆柳

朝顔や我に寫生の心あり

林
翔



蒼茫集



コインシャワー

藤原照子

生涯の一瞬の宙鮎釣らる
いにしへの息吹くれなる蓮浄土
蓮の葉の快樂水玉こぼしては
霧すでにまとひテントの組上る
星満天コインシャワーの順を待つ
全身が目となる蛇に遇ひしより

竜胆

森岡正作

蟬時雨割く一蟬の猛りやう
銀河の尾触れて山河の響動せり
人がみな己を語る虫の宿
一片の雲を離さぬ秋思かな
屹然とある竜胆に身を正す
夏痩せて芥川龍之介とも違ふ

油照り

遠藤真砂明

人の世にみんみん蟬の朝がくる
稲妻の一閃こころ決めしとき
帰省子に灯台行のバスが着く
レンタサイクル白南風の岬まで
一事成し終へて大暑に対ひけり
火の島に雲のしかかる油照り

海ほたる

北川英子

ちちははの知らぬこの家よ魂迎
海ほたるあはれ涼しき瑠璃けむり
炎天下顔失ひてすれ違ふ
真つ青な空透き蜘蛛の謀りごと
かにかくに洩民茫茫梅雨の中
源平の火の相和すも奥ぼたる

空つば 千田百里

昼顔の蔓引き父母の世に出づる
空井戸にこゑ降らせけふパー祭
道の辺の夏草に名のありや有る
風死すやこの身にも欲し伸子張
孤高とは雨中の噴水かと思ふ
街が空つばお盆ダイヤのバスに乗り

木綿 上谷昌憲

ふるさとの木綿はよろし冷奴
帰省子の身ぐるみ呑んで洗濯機
捕虫網空蟬入れて戻りたる
くろがねの身を立って飛ぶ兜虫
炎天と同色のビル落成す
ナイターの忿懣ごつた返す駅

みちのくぶり 樋口英子

泷民の青田は千の方眼紙
青胡桃みちのくぶりの蒼さかな

落し文秘めごとほどの青みもつ
働く手きれいに揃ひ盆をどり
みなどこか濡れてもどりぬ螢狩
笹の葉に真水ふくます山女籠

肩ぐるま 久染康子

啄木の恋ひたる訛聞く夜涼
泷民の雨脚太し青田原
入道雲を肩ぐるまして主峰聳つ
棒鳴の蟬のすとんと落ちにけり
サーファアの羽化する波の秀先かな
泷団扇実直な風生みにけり

天折 荒井千佐代

またひとつ蟹が家解かれ鳳仙花
勝つと信じてペーロンの艦絵描く
網干場に櫂ならべある土用あい
汽笛鋭し荒梅雨の離島便
潮焼けの指天逝の葬を弾く
一本の櫂のたゆたふ月の浦

潮鳴集

牛の絵

山田三江子

石鹼の箱に牛の絵遠青嶺
道路鏡の中縮小の街灼くる
甚平のいつ失くされし土踏まず
夜濯の乾きて月の肌ざはり
大小の塚用ブラシ夏終る

行間 田辺博充

坐禅しんしん汗が下りゆく背の谷間
水打つて詩の行間にゐるごとし
出目金の奈落を見たる目なりけり
ザビエルの丈疾うに超え蘆茂る
草いきれいつしか墓群いきれかな

落書き 高橋ちよ

夕焼が雲へ落書き明日晴れむ
一湾に一山そびゆ避暑の宿
朝顔を咲かせ齢を重ねけり
出張より戻り子のいふ夜の秋
遠花火よりも遠くを想ひをり

裏文字 坂ようこ

避暑期去り吸取紙の裏文字
蘭鑄の笑ひ袋のはじけさう
まつ白にならむと昇る噴水は
ランプ・シェード赤くてかなぶんうれしくて
逝く夏の月に突出す馬の貌



入選二位 野面積 松澤秀昭

薄れゆく峰の雪形 鋤洗ふ
山葵田を出てゆく水の速さかな
指笛に子馬 駆け寄る 蝮草
クレソンの育つ水音 夏初め
郭公や耳の穴なき土 偶たち
搾乳の盛上る泡 あいの風
万緑や棚田を区切る野面積
透きとほる湖青葉 若葉かな
螢火の消えて 瀬音の鮮しき



尺蠖の背筋波打つ岳日和
蛇打ちし棒流れゆく野川かな
梅花藻やここに始まる水の旅
小流れに浸けおく砥石走り梅雨
花栗や雲に隠るる八ヶ岳
雲の峰肩より投網押出して
大瑠璃や吹いて墨打つ宮大工
切戸きれつとにコツヘル広ぐ星鴉
牧牛に岩塩碎く夏の雲
踏めば水にじむ木道花さびた
夕焼や束子で落す足の泥

入選二位 指の跡 中尾公彦

風薫るファイルに店舗設計図
水飴に気泡の生れて梅雨兆す
あぢさゐの接写レンズの中に海
六月の眼鏡の螺子のゆるみをり
火口湖の断層かすめ岩つばめ
夏の蝶愁ひの翅をふたつ折り
荒梅雨の底ひにぬつと摩天楼
青嵐 足場の繋ぎ締め直す
ケント紙にかすかに汗の指の跡



入選三位 若狭路 佐々木よし子

丹後より入りし若狭路春しぐれ
春浅し小浜の路地を傘持ちて
春の灯や廓名残りの細格子
護摩壇に注連縄張らる夕朧
送水会撮らむと火の粉被りをり
鶺鴒に似たる白き装束泛く朧
大護摩の煙燄に消ゆ春の星
お水送りの護摩火が煽る顔・顔・顔
先導の法螺の音響む春の闇



沖作品



能村研三選

市川市

代田 幸子

東京

齊藤 實

百合の香の背きて放つ全方位
送り梅雨しほ抜きの塩ひとつまみ
夕立雲対向車線濡れてをり
髪洗ふ十二単の頃おもふ
カンナ燃ゆ門扉を閉ぢる鉄の音
高跳びのバー越す反り身雲の峰
青嵐や銚子大橋一文字
素潜りの鰭つけてをり片陰り
流れ藻の潮の香つよし南風ぐもり
水無月のレール錆びつく舟揚げ場
灯台の岬隆起す南風ぐもり
航跡の翼開きや雲の峰
梅雨あがる引き潮の描く等高線
逆しまの富士に跳び乗りあめんぼう
夜の秋明日ゆく山にルーペ置き

千葉

佐々木よし子

千葉

安藤しおん

（露館中流・雨年）

大沢美智子

松岡 三夫

ラムネ飲むころんと空を仰ぎけり
ぶつかるは試行錯誤の黄金虫
向日葵の迷路にいさぎよく迷ふ
捕虫網は家族旅行の旗印
縄文の土器に焦げ跡終戦日
太陽をひとりにとつ浮輪の児
香水を変へて類型過敏性
はまだ色湾に湛へて燕去る
ひかり曳き虚空を醒ます秋の蜂
浴身のばら色立ちてかなかなかな
文学の志死す紙魚のあと
流水に力のつばさ築を打つ
キリストのずりおちさうな新樹光
奔放の底力かな夏の草
手花火のぼとりと瞬の孤独かな

沖作品 15 句選評

*

能村研三

夕立雲対向車濡れてをり 代田 幸子

マイカー俳句というか、車が日常生活に欠かすことの出来ない必需品になった現代では、ドライブも俳句の素材になりうる。ただ車はスピードが出るものなので、歩くのとは違って自然の観察力もやや大雑把になることは歪めない。ただスピードがあるからこそいろいろな現象にも出くわすことがある。この句も然りで、今自分の車が走っているところは全く雨が降っていないのに、向こう側から走って来る車は皆濡れている。自分の車もその方向に走って行くと、どうも空の雲行きが怪しく、やがて夕立の雨の中に入って行くことを覚悟した。

高跳びのバー越す反り身雲の峰 佐々木よし子

走り高跳びは陸上の跳躍競技で、助走をつけて高く跳ぶ能力を競う競技。かつてははさみ跳びなどという跳び方もあったそうだが、今は背中でバーを越えていく背面跳びという跳び方が主流。現在の男子の世界記録は、二メートル四十七センチメートル

ルを越えるそうだから、人間とは思えない技だ。助走をして思い切り踏み切りを強くして、一気に跳躍を試みるのだが、体をいかに撓ませて反り身となりバーを乗り越えるかが問題だ。体が一瞬空に上がったような思いにもなる。その背景の雲の峰も印象的だ。

夜の秋明日ゆく山にルーベ置き 大沢美智子

山登りを前にして、入念な下調べをしている様子が窺える。どんな山でも山を甘く見る訳にはいかず、山の地形、休息場所、ルートそして天候など。山の麓の宿に到着し、夕食を済ませて明日登る山についての下調べで、この時間も心が逸り楽しい時である。山にルーベを置き、何度も何度もその行程を確認した。この句、俳句の表現に地図が出てこなくても地図がちゃんと存在していて、省略を効かせた句である。

ラムネ飲むころんと空を仰ぎをり 齊藤 實

先師登四郎の句集『咀嚼音』の中に、「ラムネ玉ころりと父子旅了る」という句がある。ここに出て来る子は私の姉で立山に「父子登攀」の時の句だ。この句は一人でラムネを飲んでいたのでろう。ラムネの玉がコロンと下に落ちた瞬間に、真っ青な夏の空を見上げた。爽快感のある句で、ラムネを飲む自然の流れが旨く描けている。

香水を変へて類型過敏症 安藤しおん

俳句をやっているものにとつて、類型、類想という言葉は常に重くのしかかる。真似したつもりは無いのに、「この句は類想句がありますね」などと言われると、少し萎えてしまつて折角の創作意欲が削がれることもある。そんな自分の心境を詠んだものだが、この句の妙は「香水を変へて」という措辞にある。皆同じような匂いの香水から自分の個性にあった香水に変えてみることにした。(以下略)